

Title	D.コリヤード著『さんげろく』の“～”
Author(s)	山田, 昇平
Citation	語文. 99 p.58-p.72
Issue Date	2012-12-10
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/70900">https://hdl.handle.net/11094/70900</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## D. コリヤード著『さんげろく』の“~”

山 田 昇 平

### 1. はじめに

キリスト教ドミニコ会宣教師 D. コリヤードの著作『日本文典』、『羅西日対訳辞書』、『さんげろく』の、いわゆる「コリヤード三部作」には同時代のイエズス会ローマ字資料に比べ、多様なアセント符号<sup>(1)</sup>が使用されている。これらの符号は「三部作」の一つ『日本文典』によると、“^” (hat) は合長音を示し、“~” (check), “˘” (acent agud) は開長音を示すとされる。また、“ˋ” (acent grave) は「アクセント」を印したものであるという。そして、“~” (til, tild) については

- (1) 母音字のうち、その上に~の印がある時には、あたかも n のようにひき伸されなくてはならない。ただし、もとのまゝの音で伸すのではなく、速かにまたおだやかにひき伸されるのである。例. vāga (我が)

(コリヤード『日本文典』大塚高信氏訳版 pp. 2-3)

としている。このような“~”の使用はイエズス会版には見られないものである<sup>(2)</sup>。これは、中世末期日本語の濁音前鼻音を表記した符号と考えられ、『日本文典』および『羅西日対訳辞書』を対象とした研究が既に行われている。これらについては次節で触れるが、共にこの符号を音声実態そのものと見る点で共通している。これに対して本稿は、〈そもそもあるテキストはどのような方法を以って書かれるのか〉をまず知るべきとする立場をとり、この符号はどのように使われるものなのかという点に焦点を置く。その上で「三部作」の内、『さんげろく』を対象とし、そこにあらわれる“~”を書記論的観点から扱い、この書記体系を明らかにすることを目的とする。

### 2. 先行研究

「三部作」の“~”に関する先行研究に森孝宏 (1973)、成嗜慶 (1995) がある。前者は『日本文典』を、後者は『羅西日対訳辞書』をそれぞれ対象としている (以下『文典』、『羅西日』)。以下それらの概要を述べる。

## 2.1. 森孝宏 (1973)

森氏はまず、『文典』のアセント符号について「同じ語に対して附してある符号に混乱がみうけられる」こと (p. 140) と「使用する符号についての説明と不一致の例が多」いこと (同頁) を指摘し、「D. Collado の表記そのものが、さほど信憑性をおけないものと言いだ得ると思う。」(同頁) とする。一方でこのようなもの全てを疑問とはせず、同資料で“~”のあらわれる語に対して、まず校合・検討を加え、情報を整理するべきという立場をとる。このような目的意識から森氏は“~”が付された母音字の次にどのような子音が続くかを分類する。そしてその内に濁子音字以外が続く例を確認し、それらを以下のように分類した。(括弧内の用例は森氏の挙げたものの内から一例のみ抽出した。)

- 一 前あるいは後に鼻子音のあるもの。及び撥音を表記したもの。(tocorōni 所に)
- 二 同じ語で異なった符合を施した例をひろえるもの。(mīchi uò / mīchīga 道を／道が)
- 三 長音符号のあるべき位置にあるもの。(mōtçu 舞うつ)
- 四 外来名 (christiani キリシタに)
- 五 大塚氏の翻字および註において氏が誤りと認めたもの。(āque mai tomò 上げまいとも)
- 六 その他 (qīqīgòto 聞き事) 森孝宏 (1973 : 141-143)

これらの内の多くは例外や誤りとして処理を行うが、三については、コリヤードが“~”の発音法を「速やかにまたおだやかにひき伸ばされる」としている点に注目し、濁音前鼻音が「幾分長音的傾向を持っていたのではあるまいか」(p. 145) と推定する。つまり、濁音前鼻音が長音的な性質を持っていたため、長音の位置にも“~”を用いることが出来たとする。

## 2.2. 成晴慶 (1995)

成氏は『羅西日』で“~”の付される子音、語ごとの環境を様々な角度から調査し、子音・形態の環境によって“~”の使用に差があることを指摘する。

まず“~”が付される直前の子音はガ、ダ行が多く、バ行、ザ行にも少ないながらも指摘する。さらに、語彙によっても“~”の使用に差があることも指摘する。例えば“fodo” (程) は全て“fōdo”と“~”が付されるのに対して、“nagara” (ながら) には“~”が付される例は一例もない。加えて、“nagare” (流れ) や“figaxi” (東) などいくつかの語では同語であっても“~”の有無にゆれがみ

られるとする。

成氏はこれらの結果を当時の濁音前鼻音の状況を反映したものとみなし、「[ガ]行「ダ」行はゆれが始まっており、「バ」行と「ザ」行には段々消滅することを示すのであろう」(p. 132) とする。また同語であっても“~”の有無に差がみられる点について「著者コリヤードのティルデに対する思惑が示されているものであろう」(p. 131) とした上で、以下のように述べる。

これは単なる誤りや見落としではなく、当時二通りの発音、つまりティルデの濁音前鼻音と濁音前鼻音を反映しない新しい発音が両方存したことを意味するものであると思われる。言い換えれば、濁音前鼻音のゆれによった表記ではないかと思われる。

成嬉慶 (1995 : 131)

そして、最終的に『羅西日』の“~”について「ある種の語にティルデには問題があるかも知れないが、全体としてはティルデを以て当時の濁音前鼻音を反映しており、かなり音声的な資料であると思われる。」(p. 132) とする。つまり同資料の“~”の使用実態をそのまま実際の音声の実態と捉える立場をとっている。

### 2.3. 先行研究まとめ・本稿の問題意識

以上、「三部作」の“~”を扱った二説を確認した。ともに“~”の「混乱」ないし「ゆれ」に着目している点に注意したい。森氏はこれを表記上の誤りとし、この交合・検討を行う。一方で成氏はこれを濁音前鼻音の実態として“~”を把握しようとする。この点に対する両者の見方は正反対であるが、“~”表記は本来、濁音前鼻音の実態をそのまま反映するはず、という前提に立つ点は共通しているといえよう。

しかし、これらのテキストから濁音前鼻音の情報を読みとるには“~”がそもそも文字としてどのように言語を反映させているかという点にも目を向ける必要があるだろう。どのようなテキストも書記されたものとして存在する。「書記」を「社会慣習に従って文字を組み合わせ、情報を記録して貯蔵したもの」と定義するなら<sup>(3)</sup>、「記録して貯蔵」された情報を読みとるには、まずそのテキストがどのような「社会慣習」に従って書かれているかという点から把握すべきである。このような問題意識のもと、本稿では特に書記論の立場から「三部作」のうち『さんげろく』を扱う。同書にあらわれる“~”がどのような社会慣習（書記体系）を用いて書かれているかを探り、同書から濁音前鼻音を読みとるための一助としたい。

3. 『さんげろく』の“~”

3.1. 濁音前鼻音を示す“~”

まず、『さんげろく』における“~”の実態を把握する。『さんげろく』で用いられる“~”を調査し、以下のように分類した。尚、本稿では大塚光信（1985）収録の大塚氏架蔵本を用いる。

- (2) a 濁音前鼻音：tōga（科） [p. 141. 7]
- b 撥音の省略：vō cotocàri（御理） [p. 6 ll. 20-21]
- c 原語の省略：xpan（Christian） [p. 121. 32]
- d 上記3種に当てはまらないもの：caitōru（買い取る） [p. 601. 37]

ここでは“~”が日本語の濁音をあらわす子音字の前の母音字<sup>(4)</sup>に付されているものを、「濁音前鼻音」とみなす。「撥音の省略」はキリシタン・ローマ字資料で“n”あるいは“m”で書かれる、日本語の撥音の省略符号として“~”を用いているものである。「原語の省略」は原語の綴りを省略していることを“~”によって示すものである。そしてそれ以外のものを「上記3種に当てはまらないもの」とした。

このような基準で『さんげろく』の“~”を分類した結果は表1の通り。これを見ると、少なくとも『さんげろく』では“~”はほぼ濁音前鼻音標示に用いられているとみていいだろう。一方で、「上記以外」に当てはまるものも少なくはない。これに関しては第6節で触れる。本稿では濁音前鼻音標示のものを中心に扱う。

表1：“~”の使用数

濁音前鼻音	923
撥音の省略	2
原語の省略	3
上記以外	49
合計数	977

濁音前鼻音標示に用いられているものを、子音字ごとに分類した（表2）。ここではスペース、改行といった区切りがある環境と、それらがなく、連続して書かれている環境とを分けた。ただし、改行であってもハイフンが用いられている場合は、積極的に連続させているものと判断し、「区切り無」に分類している。

表2：後続する濁子音別の“~”

子音字	b		d		g		j		z		zz		合計数
	無	有	無	有	無	有	無	有	無	有	無	有	
“~”有	103	1	339	51	261	119	1	0	3	1	39	5	923
“~”無	156	70	78	238	118	334	46	67	273	57	12	5	1454
合計数	259	71	417	289	379	451	47	67	276	58	51	10	2377

“~”の使用が後続の子音によっても差があることが分かる。この表を見る限り“~”は主として g, d, zz の前に付されるといえよう。また半数を切る割合の b と、

ごく少数の z の前にも付されている。これは概ね先に触れた成氏の指摘と同じ傾向といえる。加えてこの結果は、ガ・ダ行および一部のバ行に軽微な鼻音が伴うとする、ロドリゲス『日本大文典』にみられる記述とも一致する。また、スペースや改行等の区切りが有る場合は無い場合に比して“~”が付される数が少ない。

表2をみると、g, d, zz 前の環境で、区切りを跨がないにも関わらず“~”が付されない例があることが分かる。ここには、先行研究でも触れられたような、同語環境であってもゆれが見られるものが含まれる。

- (3) a vonāgo (女子)  
[p. 36 l. 26]  
b vonago (女子)  
[p. 36 l. 11]

『さんげろく』の“~”が濁音前鼻音を表記したものであるとしたら、このような同環境におけるゆれをどのように解釈すべきか問題となろう。本稿ではまず、この点を論じる。

3.2. “~”のゆれ

3.2.1 整理

『さんげろく』中で“~”の使用についてゆれを持つものを整理する。ここでは確実に“~”の使用にゆれをもつといえる例を考察の対象とする。これは上記の“vonago”のように、同語環境において“~”が付されている例と付されていない例のどちらともが確認されるものである。なお、ここでは、バ行、ザ行のものは除外して考える。ザ行はロドリゲスの記述などから基本

表3：“~”の使用にゆれを持つ語

語形	“~”アリ	“~”ナシ
“-idasu” (-出だす)	5	1
“caguirí” (限り)	4	1
“modusu” (戻す)	6	3
“vazzurai” (煩ひ)	3	1
“vogiaru” (おぢやる)	8	1
“xitagō” (随ふ)	6	1
aida (間)	20	1
cacugo (覚悟)	5	1
cuguen (苦患)	2	1
fagi (恥)	1	2
fazzureta (外れた)	1	1
fidō (非道)	3	1
fodo (程)	21	1
igi (意地)	1	2
iorozzu (万)	3	1
mada (まだ)	6	1
made (まで)	1	7
mazzu (まづ)	5	2
mizzu (水)	1	2
qizzucaí (氣遣い)	4	1
tada (ただ)	31	1
tçuideni (ついでに)	1	1
tezzucara (手づから)	2	1
tochorode (ところで)	24	4
toga (科)	46	1
vaga (我が)	7	1
vonago (女子)	2	3
xidai (次第)	5	1
xigueô (繁う)	5	1
合計	229	46

的には濁音前鼻音が現れないと思われ、実際に少数のみである。またバ行に関しては、『さんげろく』中であらわれる条件について不明確である。加えて、語を挟んで“~”が付される場合があるが、前後の語の組み合わせを統計することが困難であることや、語の組み合わせが“~”の使用にどの程度影響するかが未確定であるため、これも除外する。また、「一度」「二度」の“-do”（度）や「事共」「物共」の“-domo”（共）、助詞“ga”といった不特定の語を前接して用いる用例も同様の理由から除外する。これらを整理したものが以下の表である。なお、活用形については同語と見なし、表中では原形を“ ”で囲み、代表させた。

ゆれを持つといっても“~”が付されない場合は基本的に少数に留まることが分かる。とはいえ合計数46例は、すべて誤りとして処理するには、説明が加えられるべき数だろう。また、made は付されない数の方が多い。

上記の結果、『さんげろく』において“~”の使用にゆれをもつ語がある程度存在することを確認した。また、“~”の付されない場合は一部を除き、基本的には多くないことも確認した。

これは先に引用した森孝宏（1973）、成嬉慶（1995）で「混乱」や「ゆれ」としていたものと同様のものである。これに対して前者は実態にそぐわない除外すべきものとする立場を、後者はありのままの実態として見る立場を、それぞれ取っていた。以下このゆれに対する考察を行う。

### 3.2.2 長音符のゆれ

ところで、このような『さんげろく』におけるアセント符号のゆれは“~”のみではなく、長音の符号“^”、“~”、“”にもみられる。『さんげろく』における長音符を大塚光信（1985）の索引を元に確認した所、これらの符号を付すべき箇所を持つ語が異なり語数で226例、延べ語数で604例あるなかで、なにも付さないという例が延べ語数で53例みられた。ここには次のような同語環境であっても使用にゆれが見られる異なり語数で35例含まれる。

(4) a goxō（後生） [p. 121. 37]

b goxo（後生） [p. 221. 8]

つまり“~”と同様に全く同様の環境であっても、長音符が付されていない例が存在することが分かる。ちなみに“^”と“~”、“”についてはイエズス会版の『日葡辞書』などと食い違う語<sup>(5)</sup>もあるものの、『さんげろく』では統一的に付されており、開合の違いが揺れるということは少ない<sup>(6)</sup>。

### 3.2.3 “~”と長音符の書記体系

以上を踏まえると、濁音前鼻音を示す“~”だけでなく、長音を示す“^” “~” “~”もまた、符号を付すべき環境であっても付さない場合があることが分かる。この点に関して、当時の外国人達のアセント符号の扱いについて確認しておく。

丸山徹（1988）ではロドリゲスの『日本大文典』、『日本小文典』、自筆原稿・自筆書簡のアセント符号の使用について言及し、それと同様の傾向を、他のイエズス会士による『羅葡日対訳辞書』、『日葡辞書』におけるポルトガル語表記のアセント符号に見出し、以下の三点を指摘する。

1. アセント符号は一般に、付しても付さなくてもよいものである。
2. ‘, ‘, ^, ~ の間にはっきりした使い分けは見られない。
3. ただし、同綴異語を区別する時には、アセント符号を利用する。

丸山徹（1988：73）

少なくとも、ポルトガル語表記上では補助記号であるアセント符号は、書記レベルにおいて、特に問題がなければ付すかどうかは書き手の感覚で随意的に決められ、必ずしも付す必要はない、オプションな性質のものであった。また、豊島正之（1984）にも「アセント」について、当時のポルトガル語の正書法の側から同様の指摘がある（下線は筆者による。以下同様）。

ポ語のアセントには、強勢（ストレス）に関連した母音の音色の相違、およびそれを示すアセント符号という、音韻論と正書法上の二重の意味がある。この時代のポ語のアセントの特徴は、音韻論的に弁別される音の違いであっても、正書法上はことさらに区別するには及ばない、つまり「音が違っていても書き分けなくてもよい」と考えられていたらしい点である。 豊島正之（1984：144）

これらはポルトガル語の表記についてであるが、同様の事がコリヤードの母語であるスペイン語においてもおそらく当てはまるだろうことが、コリヤードと同時代人でスペイン生まれの商人であるアビラ・ヒロンの『日本王国記』の日本語表記について述べた、土井忠生（1982）の報告から想定される。

キリシタンものが一定の基準を設けていたのに比べると、アビラ・ヒロンのローマ字綴りにはかなり自由さが認められる。もちろんイエズス会の採用した綴字に学ぶところはあったにちがいないが、スペイン人として、スペイン語式の綴字を随時流用し、かなり便宜的方法を用いたようである。すなわち、日本語の音韻として重要な点であっても、スペイン語などで、これを欠くか、あまり問題とならないことは、必ずしも考慮せず、無視さえしている。そのことを具体的に述べるなら、オ段ウ段の長音のごときは顧みなかったらしく、長音符



号は全く見当たらない。

土井忠生（1982：276）

これらの指摘はそれぞれの母語を表記する場合の資料についてのものである点には留意が必要である。しかしそれぞれの背景にあるポルトガル語なりスペイン語なりの書記体系において、同様のアセント符号の扱いが許容されたであろうことは分かる。また、『さんげろく』巻末の正誤表をみると、本文中にはアセント符号の付されない例があるにも関わらず、それらについて修正がほどこされた例は全く見られない。加えて、この内の末尾から二つ目の修正項目には

（5） 56.l. 9. xij tadafu.l. xi tadafu.（しい糺すl. し糺す） [p. 66 ll. 17-18]

とある。これは前者を後者へと修正することを指示したものであるが、実際の該当箇所をみると“xii tādafu”（p. 56 l. 10）とある。つまり、修正のために抜き出した際には“~”は付されていない。正誤表自体は“xii”から“xi”への修正を目的としており、“~”は単に落とされただけととれる。このような“~”の扱いは、『さんげろく』においてアセント符号はその有無に関して基本的には省みられることが無いものだったためではないだろうか。

このような『さんげろく』の実態やポルトガル語、スペイン語の書記体系を省みる限り、『さんげろく』のアセント符号は、付しても付さなくてもよいオプションな性格なものであると考えるほうが良いだろう。そのため、『さんげろく』に見られた“~”や長音符のゆれについては、無いものは単に付されなかったに過ぎず、「誤り」やこれらの音が存在しないことを積極的に示すものと捉えるべきではない。

#### 4. 符号間の優先順位

次に、“~”とその他の符号との関係について考えたい。『さんげろく』を始めとする「三部作」には長音をあらわすのに、“~”“^”“^”が、濁音前鼻音を示すのに“~”がそれぞれ用いられるとした。このうち“~”がイエズス会版ではこのように用いられていないのは先に述べた通りである。そのため、ここではイエズス会版において問題にならなかった「濁音前の長音」という環境下で、用いるべき符号が重複する可能性が予想される。これは実際に成嗜慶（1995）で『羅西日』において報告される。

「côgaitta」 「funèga cacari」のように開合や<sup>マ</sup>にアクセントなどの表示が付いているものにはティルデのマークが付いていない。おそらく、開合やアクセントなどのような他の符号がある場合は、ティルデのマークより優先されたのであろう。

成嗜慶（1995：129）

これは符号間の優先順位について述べた指摘である。ここでは「アクセント」を

示すとされる“”も含めているが、“”に関しては実際にどのような場合に付されるかが現段階で明らかにされているとは言い難い。本稿では注2でも述べた通り、“”が関わるものへの判断は保留とする。また、「開合や<sup>マ</sup>アクセントなどの表示が付いているものにはティルデのマークが付いていない」とある箇所については、アクセント符号を同じ個所に二つ付す場合を想定しているようにも思えるが、意図が汲み難い。

しかしながらこのような符号間の優先順位があるという指摘は重要である。本稿ではこの指摘を参考にしつつ、以下『さんげろく』での符号間の優先順位について論じる。

#### 4.1. 符号環境の重複の処理

『さんげろく』において「濁音前の長音」となる環境を持つ語を調査した結果、延べ語数で67語確認した。そしてそのうちの60例は長音符が使用されており、7例が“~”、1例のみ“”で書かれていた。

(6) a chōgui (調儀) [p. 201. 15]

b qiōdai (兄弟) [p. 341. 4]

長音と濁音前の環境が重なる場合、概ね開合符が優先されているといえる。つまり成氏の指摘と同様に、『さんげろく』にも符号間に優先順位があり、長音符と“~”では長音符の方が優先的に用いられるものとされていることが分かる。

#### 4.2. 反例について

一方で次のような反例となるものもある。

(7) a sō gozarēba (さうござれば) [p. 541. 5]

b nusūda (盗うだ) [p. 601. 37]

このように「濁音前の長音」環境で“~”が優先されるものは、全7例確認した<sup>(7)</sup>。これについては、森孝宏(1973)で指摘されたような、長音符のみが来るべき箇所に“~”が付される例を含めて説明できる。『さんげろく』でも長音符の箇所に“~”が用いられる例が確認できる。これは表1で「上記以外」に分類したものの一部に該当する。

(8) a mōfu (申す) [p. 81. 3]

b sō sūru (さうする) [p. 261. 3]

同様の例はザ・バ行前も含めて、延べ13例見られる<sup>(8)</sup>。森孝宏(1973)ではこれを“~”が鼻音符号としても長音符号としても用いられたためとしていた。しかし、

コリヤード自身が『日本文典』においてそれぞれの符号の使用を定めたのにも関わらず、その規範から外れるということは考えにくいのではないか。

上記に示した、濁音前環境ではない、長音符があるべき箇所“~”で書かれている13例の内「総別」の2例を除く11例は本来“~”や“~”で書かれる開長音の語である点に注意したい<sup>(9)</sup>。このうちの“~”は“~”としばしば形状が類似する。

**mōfu** (申す) [p. 61. 23]

**gozarē domō** (ござれども) [p. 61. 35]

上が“~”で、下が“~”である。この2例の形状はかなり近似しているといえよう。このような例を見ると“~”と“~”は視覚的に誤りやすかったことが疑われる<sup>(10)</sup>。ちなみに「濁音前の長音」で“~”が付されている7例の内6例も本来オ段開長音、1例がウ段長音の語で、いずれも“~”が用いられる環境である。これらを合せると18例であるが、実際に開長音を示す“~”や“~”が『さんげろく』で合計385例(“~”：228、“~”：157)あることから、これは誤りとするのに多すぎる数ではない。“~”が森氏のいうような長音と濁音前鼻音をかねる符号として用いられるなら、「濁音前の長音」の環境においてさらに多く用いられても良い。本稿ではこれらの状況から“~”が開合符として用いられる例は、濁音前にあるものも含めて誤りとして考える。つまり、これは濁音前鼻音と長音との認識の段階で混乱したのではなく、書記段階における誤りである。

#### 4.3. 優先順位の背景

ここまでで濁音前鼻音を付すべき環境と長音符が付されるべき環境とが重複した場合、長音符が優先されるとした。この優先順位は何に基づくか。

ロドリゲス『日本大文典』には、濁音前鼻音に関しての記述がみられ、その項目中ではこれを符号で表記するが、その他のイエズス会のローマ字活字資料に濁音前鼻音が表記されない。これについて橋本進吉(1932)では「この鼻音化の符號は、當時の葡萄牙の耶穌會士の間に用ゐられた日本語の羅馬字綴には、全く附されて居ない。それほど、この鼻音の現象は規則的であつたのである」(p. 4)とする。『さんげろく』の優先順位も同様の理由で説明できよう。つまり、橋本氏の言うように濁音前鼻音は一定の濁音の前に規則的にあらわれるものであった。一方で長音には明確な規則性は見られず、日本語母語話者でない限りあらわれる箇所を特定するのは困難である。そのため、二つの音が現れるべき環境が重複した場合には、特定の難しい長音の方が優先的に表記されたと考えられる。つまりこれは符号を付すことができる空間の問題に過ぎず、濁音前鼻音の存在が積極的に否定されているわけで

はない。よって、この優先順位もあくまで書記上の都合に基づくものといえよう。

## 5. 「三部作」とイエズス会版との差

### 5.1. 両者の“~”の解釈

繰り返しになるが、『さんげろく』含め「三部作」には開合を示すためのアセント符号に加えて、濁音前鼻音標示のアセント符号“~”も用いられている。イエズス会版では長音符について、付すべき箇所全てに付し、正誤表でも修正を加える<sup>(11)</sup>など、厳密な表記がなされる。一方で、濁音前鼻音に関しては一切表記されていない<sup>(12)</sup>。濁音前鼻音の表記は「三部作」独自の特徴であって、両者はその点で大きく異なる。しかし、前節で見たような符号間の優先順位が、イエズス会版に濁音前鼻音があらわれないことと同じ理由で説明できるのであれば、それぞれ「書く」「書かない」の方針上の差はあるものの、この音に対する理解は、語ごとに異なる長音に対して、規則的であるため特定が容易である、という点で一致する。

### 5.2. 方針の差

では、イエズス会とコリヤードの両者で日本語の濁音前鼻音に対する理解が基本的に一致しているにも関わらず、その表記の有無に関して方針の差が生じた原因は何か。本稿の目的とはややずれるが、私見を述べておく。

『さんげろく』独自のアセント符号にはこの他に“”がある。これは同じようにイエズス会版ではあらわれない。コリヤードは『日本文典』で以下のように述べる。

- (9) 単語のアクセントについては、それを附すべき字母の上に適当な場所に独特の記号を附し、それによって話者の意味が理解されるように深い注意を払った。例えば qèixèi<sup>(13)</sup> (傾城) には二つの è のどれにもアクセントがあり、fìbicàxi (響かし) は最初の i と a とにアクセントがある。

(大塚訳 pp. 4-5)

ここからこの符号はアクセントを示すのに用いられると考えられる。先に触れた通り、この「アクセント」が具体的に何を指すかは明らかになっていない。しかし『さんげろく』では、イエズス会版にはあらわれないアセント符号が用いられるため、より複雑なアセント符号体系となっているといえる。ここから、コリヤードはその著作において、少なくとも音に関して、より広い情報を表そうとしていることが窺えよう。

なぜコリヤードがこのような方針をとったかについて、筆者は現段階で明確な考

えを持たない。しかし、見通しとして『さんげろく』のテキストとしての性格からの説明づけを試みたい。つまり、おおよそのイエズス会版が日本で出版されているのに対して、「三部作」はローマでの出版である。そしてこれらはほぼ同時期に出版されており、また明らかに日本語学習を意図した構成である。「言語学習」という点で見た場合、イエズス会版は対象となる言語に実際に触れることが出来る環境に学習者がいることが前提となっている。一方で、「三部作」は実際の日本語を聞くことが出来ない学習者が念頭にあるのではないだろうか。このような学習環境の格差を考慮に入れると、「三部作」には日本にいれば無視されてしまうような情報まで、幅広く付け加えられることが望ましい。また『さんげろく』は左頁に日本語文、右頁にはラテン語文という対訳形式をとっている。コリヤードはその理由を序文で「初学者がそれを手掛りとして日本文へと進み、日本語の表現ならびにその連なりの意味を一層容易に把握し、より深く究めることができるようにとの配慮からである。」(大塚訳 p. 7) とする。また、同じく序文には同書が「告解文および教義宣言」の形を採ったことを「宣教師たちの耳と舌とが、すぐさま訓練を強いられることになる事柄に、最初からなれておくようにと思ったからである」(同頁)という記述が見え、コリヤードが日本布教を前提とした実践的な知識を志向していることが分かる。このような記述からもコリヤードの日本語学習レベルの低い者達、あるいは生の日本語に触れられない者達が実践するための配慮が窺える。「三部作」における多様なアセント符号の使用も、このような文脈上で位置づけるべきではないだろうか。ただし、これ以上の考察を進めるには内容や文体、「三部作」のヨーロッパにおける使用実態などからより多面的にみる必要がある。この点に関しては現段階で考えうる可能性を提示するまでとし、今後の課題としたい。

ここで、表1で「上記以外」に分類したものについて触れておく。これは全49例であった。この内には先に“”と“~”の形状の類似による誤りとした、開合符が付されるべき箇所“~”が付されたものが含まれる((10) a)。このような例は全9例であった。これは説明可能なものである。またこの外にはナ行、マ行、撥音の鼻音の前後に“~”が付されているものが多いことに注意するべきだろう((10) b)。

b tōmùru (止むる) [p. 50 l. 21]

のと同様のものであろう。本節ではこのような鼻音周辺の“~”は森が「その影響をうけたものとも思える」としたのと同じく、鼻子音や撥音の持つ鼻音性に引かれて“~”が付されたと考える。その場合、「さんげろく」における“~”は単に濁音前に機械的に付されたのではなく、ある程度実際の発音を反映させて付されたものとも考えることもできる。しかし、「さんげろく」全体のナ、マ行及び撥音の中でこの例は大きな割合を占めるものではない。そのため何故これらに“~”が付されたかについて積極的な説明を加えるのは難しい。だが「鼻音性の音の周辺」ということで一応の説明は可能である。

このように「上記以外」に分類したものについて見ると、その中で「開合符であるべき箇所」と「鼻音性の音の周辺」のものについては説明が出来そうである。また「本来開合符でかつ鼻音周辺」というものも1例みられた。「上記以外」に分類される49例から、これらを除くと17例となる。このうち明らかな誤り等を含むものが5例見られ、最終的に12例<sup>(15)</sup>となる。これらは例外とみなせる数であらう。

## 7. まとめ

本稿は従来研究が「三部作」のアセント符号“~”は音声実態を反映するという前提で行われているのに対し、書記レベルでその検証を行うことを主な目的としたものである。その結果、以下の四点が結論として得られた。

- ・「さんげろく」で書かれる“~”は主に濁音前鼻音標示に用いられる。
- ・“~”及び長音符は基本的に付しても付さなくてもよい、オプションな性格のものである。
- ・“~”と長音符が重複した場合、長音符が優先的に付される。
- ・このような優先順位は濁音前鼻音が情報として特定し易いことに基づく。
- ・「三部作」とイエズス会版とのアセント符号体系の差は両者の学習環境の反映か。

本稿は濁音前鼻音標示の“~”自体の書記法を中心に考察を行ったものである。本稿では扱わなかったが、バ行前の“~”の例や成氏の指摘にあるようなガ行・ダ行であっても“~”が一切付されることのない語など〈“~”を付すべき条件はどこだったか〉という点はまだ不明な点が多い。この考察は今後の課題であるが、これらは中世末期の濁音前鼻音を知る上で有用な手掛かりになりうる。本稿は、こういった考察の前段階における必須の手続きといえよう。

注

- (1) これらの符号が指すものは日本語学の術語である「アクセント」とは異なるものである。そのためポルトガル語の “acent” を用いることで弁別する。
- (2) 同じくアクセントを示す “˘” もイエズス会版には見られないものである。しかしこの符号が実際に当時のアクセントをあらわしているとはいえない。コリヤード『西日辞典』の自筆稿本のアクセントについては小島幸枝 (1972) に言及があるが、明確とは言いがたい。「三部作」の “˘” が具体的に何を指すものかは明らかにされていないというのが現状であろう。本稿では “˘” について不明確な部分が多いため、ここでは対象として扱わない。
- (3) 小松英雄 (2000: 新装版 p. 6)
- (4) ちなみに『さんげろく』では「原語の省略」のもの以外の “~” は全て母音字の上部に付されている。
- (5) 日葡辞書で cataippō (片一方)、ioriō (寄り合ふ)、miōmon (名聞)、nhōbō (女房)、teitō (梯磴) と書かれる語が、『さんげろく』では cataippō、ioriō、miōmon、nhōbō、teitō と書かれる
- (6) zōgon (雑言)、cōreocu (合力)、qenbō (憲法)
- (7) chōdo (ちょうど) [p. 8 l. 5], xōgun (将軍) [p. 18 l. 17], fiacuxō domo (百姓ども) [p. 20 ll. 7-8], jūgo rocūdo (十五六度) [p. 22 l. 39], sō de (さうで) [p. 30 l. 3], sō gozarēba (さうござれば) [p. 54 l. 5], nusūda (盗うだ) [p. 60 l. 37]
- (8) mōsu (申す) [p. 8 l. 3], xōzuru (生ずる) [p. 8 l. 10], sōbet (総別) [p. 10 l. 12], tamō coto (給うこと) [p. 10 l. 16], sō suru (さうする) [p. 26 l. 8], vxinauō to (失はうと) [p. 26 l. 13], caburō ichigo (被らう 一期) [p. 26 l. 25], torō tote (とらうとて) [p. 26 l. 28], feifō no (兵法の) [p. 34 l. 1], nhōbō vo (女房を) [p. 36 l. 2], sōbet (総別) [p. 38 l. 14], nhōbō gurui (女房狂い) [p. 38 l. 23], xōtocu (生得) [p. 52 l. 21]
- (9) このうち合長音で書かれた二例は共に「総別 “sōbet”」である。『さんげろく』にこの語は全 5 例あらわれ、他の三例は全て “sōbet” の形で書かれている。こはやはり “˘” が用いられるべき箇所であろう。これについては説明ができない。しかし、二例とも同語である点やバ行である点などから別の事情によるものかもしれない。
- (10) この逆となる “~” を “˘” に誤ったとみられる例も二例見られる。  
tō-/ga (科) [p. 10 ll. 30-31], mī-/zzu (水) [p. 12 ll. 35-36]  
いずれも改行を挟む点に注意が必要であるが、特に後者について、キリシタン・ローマ字資料でイ段長音を書記した例は確認出来ない。これも形状の類似による誤りと見るべきであろう。
- (11) 例えば『サントスの御作業』第一巻の正誤表には p. 81 l. 4 の “xoju” → “xojū” (所従) とする、長音符が付されなかった箇所を訂正する例もみえる。
- (12) これは当然ながら版本に限定される。イエズス会資料であってもバレットの写本などには濁音前鼻音を示すとみられる符号が用いられている。
- (13) 訳文ではこの個所は “qèi èi” とされている。原文に “qèixèi” とあることから誤植と判断し、修正した。
- (14) nēn (年) [p. 4 l. 11], fīfsōcu nī iotte (逼塞によって) [p. 4 l. 13], vō mizzu (お水) [p. 4 l. 17], marāxitē mātā (まらして また) [p. 4 l. 31], micāguitte (見限って) [p. 18 l. 11], nozōmī no (望みの) [p. 22 l. 4]1, qī nī favātte (気に障って) [p. 22 l. 20],



- nīsando (二・三度) [p. 24 l. 1], nōchi (後) [p. 24 l. 33], marē ni (稀に) [p. 26 l. 10], aitē ni (相手に) [p. 26 l. 23], sarī nagara (さりながら) [p. 28 l. 1], uòqī marafuru (置きまらする) [p. 40 l. 15], fomēraruru (褒めらるる) [p. 40 l. 20], xīnjit (真実) [p. 42 l. 31], iranu cavo xitē mono vo (知らぬ顔してものを) [p. 50 l. 1], xtōmūru (止むる) [p. 50 l. 21], ichī dō ni (一度に) [p. 58 l. 33], cāmi (神) [p. 60 l. 1], nī moie (に 燃え) [p. 60 l. 8], nāca (仲) [p. 62 l. 19], mārāfuru (まらする) [p. 62 l. 37]
- (15) vo cōto (お事) [p. 6 l. 10], mefarēta (めされた) [p. 26 l. 3], cōto (事) [p. 28 l. 23], maraxīta (まらした) [p. 36 l. 6], tōdōqeide (とどけいで) [p. 38 l. 29], vomoi itasaide (思い致さいで) [p. 22 l. 34], gentio dēra (ゼンチヨ寺) [p. 20 l. 16], tōqī ua (時は) [p. 14 l. 31], sāzzucātte (授かつて) [p. 12 l. 39], fucaī toga (深い科) [p. 58 l. 27], vōtōco (男) [p. 38 l. 36], caitōru (買い取る) [p. 60 l. 37], macāri iru (まかりいる) [p. 22 l. 15], cāiesaide (返さいで) [p. 60 l. 39], āzzuqēte (あずけて) [p. 48 l. 23], tçucamatçuraidē, gozaru (仕らいで、ござる) [p. 16 l. 2]

#### 参考・引用文献

- 大塚光信 (1985) 『コリヤードさんげろく私注』 臨川書店
- 小島幸枝 (1972) 「コリヤードのアクセント—西日辞書の自筆稿本をめぐって—」『国語国文』 41-11
- 小松英雄 (2000) 『日本書記史原論 補訂版』 笠間書院 (新装版 2006)
- 成嘯慶 (1995) 「コリヤード著『羅西日対訳辞書』のティルデ表記について」『東北大学言語学論集』 4
- 豊島正之 (1984) 「『開合』に就て」『国語学』 136
- 土井忠生 (1942) 『吉利支丹語学の研究』 晴文社 (1971年の三省堂からの新版による)
- 土井忠生 (1982) 『吉利支丹論攷』 三省堂
- 橋本進吉 (1932) 「國語に於ける鼻母音」『方言』 2-1 (『国語音韻の研究』 岩波書店による)
- 丸山徹 (1988) 「キリシタン資料「開合表記」成立の背景」『南山国文論集』 12
- 森孝宏 (1972) 「D.Collad の鼻音符号について」『今泉博士古稀記念国語学論叢』 桜楓社

#### 参考・引用テキスト

- D. コリヤード 『さんげろく』: 『コリヤードさんげろく私注』 (臨川書店 1985)
- 『日本文典』: 『コリヤード日本文典』 (風間書房 大塚高信訳1957)
- 『羅西日対訳辞書』: 『コリヤード羅西日辞典』 (臨川書店 1966)
- J. ロドリゲス 『日本大文典』: 『ロドリゲス日本大文典』 (三省堂 土井忠生訳1955)
- 『サントスの御作業』: キリシタン資料集成『サントスの御作業』 (勉誠社 1976)

付記: 本稿は、日本語学会2009年度秋季大会 (於島根大学) における口頭発表、および2010年度信州大学大学院人文科学研究科に提出した修士論文に加筆・修正を加えたものである。